

過ぎゆくそばで

gonzou777

1 季節は仕分けする

朝の学校の廊下を歩く僕のすぐそばを、何人かの生徒たちが足早に過ぎていった。踊り場の窓からさしこむ朝の新鮮な光をあびながら、階段をのぼっていく僕の足どりは、自分でも力ないようにおもえた。

予鈴にはまだ時間があるので、自分の教室のある階をのろのろと踏んだ。

その時、僕の目に学校の上級生と並んで立っている桐原絵里の姿が見えた。ぼやけていた僕の頭が一気に覚醒する。

桐原絵里は廊下の壁に背を預けて上級生〈男〉の話にうなずいていた。

「桐原って部活の先輩と付き合ってるらしいぜ」

高校に入学してから一か月程過ぎたころ、そんなうわさが僕の耳に届いた。僕は足元がグワングワンするのを感じた。うわさを本人に確かめるなんて果敢な行動はもちろんしていない。

僕が桐原と高校生になってほとんど話さなくなったのは、クラスが別々になったからだけではなかった。

僕がこの高校を選んで入学したのはたまたま学力に合わせられたのが半分、残りは桐原の進路だったからだ。

その桐原が僕以外の男子、しかも彼女の所属するバレエ部の先輩と付き合い始めたという情報は、僕を打ちのめした。一瞬で。

春の朝一から容赦ないポディーブローをくらった気分になる。廊下に呆然と突っ立っているわけにもいかず、僕はなるべく平静を装って桐原達のよこを通り過ぎようとした。

「おはよう」

僕に気付いた桐原は手を挙げてさわやかな声をかけてきた。一瞬素通りしていってしまうかどうか考えた。

「おは　　よう」

明らかに不自然な間であいさつを返して反射的に挙げた手が宙をさまよう。

もちろん先輩の顔などは見ない。

ふりきるように僕は自分の教室に入ると、一日のはじめから 覇気のない溜息をついた。